

《第Ⅳ部》 編集後記—あとかぎにかえて—

編集後記—あとがきにかえて—

1982年度生 水ノ江和同

かつて『実習室だより』という会誌があったらしいということは、私が学生の頃（1982～1988年）に先輩から聞いてはいたが、2020年1月にその実物が同志社大学歴史資料館に「酒詰資料No.83～96」として存在することを知った。早速内容を確認すると、1960年前後の実習室の活動内容や構成メンバーとその近況、各自の研究状況をはじめ、当時の埋蔵文化財保護の実情や大学としてのその具体的な対応などが詳細に記されており驚いた。そこで今回、同志社大学における考古学研究の歴史を明らかにすることはもちろん、日本における埋蔵文化財保護の黎明期の状況を知る上でも重要と考え、復刻して次世代に伝えることが必要という考えに至った。以下簡単ではあるが、いくつかのテーマを掲げて『実習室だより』の内容を概観してみたい。

1. 『実習室だより』の全体像

『実習室だより』は、1957年4月に第1号が創刊され、翌1958年2月の第11号まで毎月刊行された。その後しばらく途絶えるが、1961年11月に第2巻第1号（通算第12号）が刊行されるが、冒頭の「ご挨拶」には「各方面からの要求」と一部学生の援助により再開すること、「学問的にむづかしいことは書かない」こと、「告知板」的役割を重視することなどが記述されている。その後また少し途絶えるが、1962年9月に第3巻第1号（通算第13号）が刊行され、この号が実質的に最終号となっている。

第1～11号までの内容は、先述したように多岐にわたるが、第12・13号はOBの消息や動向、さらには実習室での出来事の記述が中心になっておりそれまでとは様相が大きく異なる。なお、第1～5号まではさまざまな筆跡がみられるが、第6号以降は筆跡から大部分は酒詰先生自らが記述したものと考えられる。

遺跡の発掘調査報告は『実習室だより』を構成する重要な要素になっているが、当時としては報告の機会が得られずこの『実習室だより』でしか報告されていないものもある。

第11号の酒詰先生による「文化財保護について」は特に興味深い。1954年に改正された文化財保護法により、周知の埋蔵文化財包蔵地における開発事業に対してその事業者へ届出が義務づけられたが、教育委員会が発掘調査を実施するシステムが構築された1964年以前の苦しく厳しい状況がよくわかる。特に、発掘調査費用の原因者負担という考えが当時はまだなかったため、いかにその費用を捻出・確保するかという苦悩は生々しい。考古学者が遺跡の保護を考えず出土品や成果欲しさに重要な遺跡を無頓着に発掘調査する悩ましい現状、地域の子も達への啓蒙活動の重要性喚起、報道関係を通じて考古学の役割や遺跡保護の重要性アピールなど、いずれも現在の文化財保護の理念に通じるものばかりで、その先見性には大変驚かされる。1960年前後の大学の考古学研究室の在り方や実態を知ることができる、貴重な記録である。

2. 酒詰仲男先生の『日録』から

酒詰仲男先生は大変詳細な『日録』を残されている。その内容は、まさに日々の生活や個人的な出来事を綴った日記を中心に、論文や各種原稿の下書き、発掘調査の日誌、各種資料調査の記録（精度

の高いフリーハンドの実測図など)、なども含まれる。

酒詰先生が東京大学理学部に所属する直前の1938（昭和13）年5月5日から、同志社大学に着任された直後の1953（昭和28）年4月28日までについては、ご子息の酒詰治男氏の編集により、東京大学総合研究博物館標本資料報告の第72・77・78・82・83・88・89・91・96・97・100・103号の12冊に収録されている。同志社大学に着任されて以降の内容については、水ノ江和同2019「酒詰仲男先生と博物館学－同志社大学に博物館学芸員課程が設置された頃－」『文化史学』75（文化史学会、357-367頁）に、博物館学設置に関する記述を抜粋して紹介している（1952年10月から1954年5月について）。

今回、『実習室だより』に関する記述を探したが、意外と少なかった。しかし、当時の実習室の雰囲気を知ることのできる記述がいくつかあったので紹介したい。

『実習室だより』第2号では、1957（昭和32）年4月23日の第1回先史学会例会の概要が掲載されているが、『日録』によれば、開始は15:00からで、岡田茂弘・千代肇・石部正志・森浩一氏の発表の後、18:30まで実習室で茶話会をおこない談笑している。なお、岡田茂弘氏については、4月4日に大学院の入学試験を受け、5日の教授会の合格判定会議を経て6日に合格発表、9日に入学式、17日に歓迎会、18日に四天王寺の発掘現場と、大学院入学直後の慌ただしい様子が克明に記録されている。

『実習室だより』に関する記述は以下がある。

- ①1957年6月8日「10時に登学。岡田君は実習室だよりをつくることに夢中」
- ②1957年9月18日「午前中地図の整記完成、岡田君早速実習室だよりの原紙を切りはじめる」
- ③1962年9月20日「実習室だよりの原稿を書くため、結局昼まで家にいる。」
- ④1962年9月21日「10時に自宅を出て登学し、いよいよ実習室だよりをキリはじめる。」

①は6月10日に発行された『実習室だより』第3号のこと、②は9月20日に発行された『実習室だより』第6号のこと、③④は1962（昭和37）年9月20日に発行された『実習室だより』第13号のことである。『実習室だより』の発行は毎月20日と決まっていたようで、その直前の慌ただしさが伝わってくる。なかでも③④では、酒詰先生がご自分の原稿を執筆するため午前中はご自宅で過ごされた様子は、酒詰先生の生活スタイルが垣間見えて興味深い。

なお、このほかに『実習室だより』とは直接関係しないが、『日録』に興味深い記述をみつけたので、ここで紹介したい。

1957年5月20日「午後3時半から『文化史学』編集会議に出席。中尾さん、竹中さん、柴田さん、角田氏、三品氏、石田氏、菅原さん、安田さん、小川君と安井君。結局、角田氏と杉井君、森君等の原稿を出すことに決め、あと会の運営の経済面と、それに関する会則改正について話し合い、5時半に解散。」

1957年9月28日「今日は午後、岡田君、石部君がやる第1回研究会を研究室の仕事にする会にしよう」と提案したが、やはり若い連中の啓蒙と研究を発表する会にしたいと言うことになった。とに角、予はこちらから働きかけても学生の方で中々動かなかったのであるが、逆に学生の方からこう動して来たことはよいことと思う。読書解説もやるという。結構なことである。」

3. 先史学と考古学、先史学実習室と考古学実習室、先史学研究会と考古学研究会

酒詰先生が同志社大学に着任された当時、「先史学」という言葉が主体的で、「考古学」が客体的に使われる時代が約10年続いた。その詳細については、本書第三部の岡田茂弘氏や白石太一郎氏の文章に詳しいのでそれを参照していただきたい。その上で、『先史学研究』や『同志社考古』の編集後記やあとがきから、このことを確認してみたい。

『先史学研究』 1 (1959年6月1日発行)

【編集後記】(白石・岡田)

昨年中から計画されていた機関誌「先史学研究」の創刊号が漸く発刊される運びとなった。誌名中の「先史学」という名称は最近ではあまり用いられない言葉であるが、酒詰仲男教授が常に科学的方法による考古学を先史学と呼称しておられる事から取られたもので今日の考古学の意味する内容とまったく一致するものと考えてよい。従って、先史時代の考古学というように時代その他の研究対象を限定するものでは決してない。このことは、本誌の内容を通観しても明瞭であろう。

『同志社考古』 1 (1960年1月1日発行)

【編集後記】(伊藤)

創刊号の出来るまで、考古学研究会と改称したのは6月8日ですからまる半年、なにやかやと発行が延びてしまったのは全く編集子の責任で申しわけありません。考古学研究会の新方針の下に出来る限りくだけた雑誌にと考えています。文学部、経済学部、法学部、商学部、工学部にわたる多数の会員を代表する雑誌としての性格を持たせてゆきたいのです。

『先史学研究』 3 (1961年7月20日発行)

【編集後記】(石部)

既刊の先史学研究1・2号は同志社大学学友会学術団所属の先史学研究会の会員が中心となってそれに、わたくし達がオブザーバーとして参与したものであった。こうした学部生諸君の業績を発展的に受けついで、本号からは、酒詰教授と大学院卒業生および在学生を中心とする機関誌に衣替えすることになった。一方、先史学研究会も、1960年度に会名を考古学研究会に改め、本年1月機関紙「同志社考古」1号を刊行した。今後は、「先史学研究」と「同志社考古」の2本立で同志社大学考古学の進展のため大いに努力するつもりなので、大方の御支援を希望します。

今回、『実習室だより』の発見を契機に復刻版の刊行を考え、まずは学生諸君によるデジタルデータ化、伊藤久嗣氏による校正、当時の関係者による回顧録のご執筆、酒詰治男氏所蔵の酒詰仲男先生の「日録」調査、そして『同志社大学歴史資料館館報』への投稿と、およそ1年に及ぶ作業を進めました。すでに失われた情報が多く、必ずしも十分な内容とは言えませんが、酒詰先生が着任された当時の同志社大学考古学研究室での出来事や雰囲気、を多少なりとも復元することができたと考えます。

最後になりましたが、本書の刊行に至るまで何度もご相談させていただいた岡田茂弘・伊藤久嗣の両氏、回顧録をご執筆いただいた鈴木重治・白石太一郎・細見克・堀江門也氏、そして編集・刊行にご協力いただいた若林邦彦・浜中邦弘の両氏に心からお礼申し上げます。